

# FDワークショップの実施と評価 —1995年度ワークショップ—

宮本友弘・望月 要

本プロジェクトでは、1994年度より、大学教員対象の各種メディア技術を利用した研修の施設として、ファカルティ・ディベロップ・セミナー室（FDセミナー室）の整備を開始した。第一期整備の完了した1995年度は、当時の環境で利用可能なマルチメディア教材を用いて、ワークショップを試験的に1回実施した。ここでは、その実施概要と参加者の事後評価について報告する。

## 1 ワークショップの実施概要

### (1)目的

マルチメディア教材の利用経験のない大学教員にマルチメディア教材を個別実習してもらい、コンピュータ及びそれと連動した各種メディア機器の基礎的な操作、ならびに、マルチメディア教材の設計思想と構造について理解させる。

### (2)実施時期

同一内容のセッションを2回設定し、1995年11月6日に第1セッション、7日に第2セッションを実施した。時間はともに、15時15分～17時15分の2時間であった。なお、放送教育開発センターでは、1995年11月7日、8日に「国際シンポジウム」が開催されており、FDワークショップの第2セッションは、シンポジウムのポスターセッションと同時間帯であった。

### (3)対象者

文科系の大学教員24名。参加者は、各セッション12名ずつ割り当てられた。当時の環境は、2名ずつで使用する受講者卓が6式までしか整備されていなかったため、1回のセッションの定員は12名であった（本報告書「FDセミナー室整備状況と今後の課題—メディア技術とFD—」参照）。

### (4)担当講師

本プロジェクトのメンバーのうち、佐賀啓男（研究開発部教授）、望月要（同助教授）、宮本友弘（同助手）が担当した。それぞれの役割は、佐賀が全体のレクチャー、望月、宮本が実習の際のインストラクターを務めた。

### (5)使用マルチメディア教材

本プロジェクトのメンバーの1人が開発に携わったマルチメディア教材「文京文学館」を使用した。「文京文学館」の概要を以下に示す。詳細については、「試行としてのメディア・ミックス教材の開発第1次報告書」（財団法人日本視聴覚教育協会、1989）を参照のこと。

①開発の背景 「文京文学館」は、（財）日本視聴覚教育協会の、文部省助成による「ニューメディア教材の研究開発事業」の一環として開発された我が国初の本格的なマ

ルチメディア教材である。1988年度に開発が開始され、2年後の1990年度に一応の完成をみている。その後製品化され、(株)パイオニアLCDから販売されている。

②メディア構成 「文京文学館」はレーザーディスク(LD)とマッキントッシュ(アップル社製コンピュータ)用のカード型データベースソフトであるハイパーカードのスタックから構成される。使用に必要な機器は、LDプレーヤとその呈示用モニター、および、マッキントッシュ式である。LDプレーヤとマッキントッシュ本体はシリアルケーブルで接続され、ハイパーカードの各スタックに組み込まれたボタンによって、マッキントッシュのディスプレイ上からLDプレーヤの動作が制御される。ただし、LD内の映像リソースは、プレーヤに接続されたモニターのみに呈示され、マッキントッシュには取り込まれない。

なお、「文京文学館」のFDセミナー室のマッキントッシュの環境(CPUはPowerPC、OSは漢字Talk7.5)への対応は、(株)パイオニアLCDに依頼し、正常な動作が確認された。

③内容構成 LDには、森鷗外、夏目漱石など、東京の文京の町に住んでいた文人たちの交流を描いた16ミリ映画「ぶんきょうゆかりの文人たち—観潮桜をめぐる—」(東京・文京区教育委員会企画、岩波映画製作所制作、1988)が収録されており、ハイパーカードの一部のスタックからのランダムアクセスが可能となっている。一方、ハイパーカードの各スタックには、映画に関連した作家・作品・地図・年表などのテキスト、グラフィック、ならびに、朗読音声記録されている。「文京文学館」は両媒体の連動により構築されたマルチメディア型のデータベースであり、学習者は基本的にハイパーカードによって情報検索を行い、必要に応じてLDにアクセスすることになる。

#### (6)プログラム

ワークショップのプログラムは以下の通りであった。

- ①「文京文学館」の開発の背景を中心としたレクチャー(20分)。
- ②「文京文学館」の実演(20分)。
- ③参加者による「文京文学館」の個別実習(1時間)。
- ④討論会(20分)。

#### (7)事前準備

①ワークショップの周知 FDワークショップの開催の案内(資料1参照)を、先述した国際シンポジウムの案内に同封して全国の大学に送付した。FDワークショップの開催の案内には、ワークショップの主旨、定員、開催日時、場所、担当講師、対象(マルチメディア教材の利用未経験の文科系教官)、参加費(無料。旅費は参加者の負担)、当日のプログラム等が記載された。なお、送付は、国際シンポジウムの担当事務局(管理部研究協力課国際協力係)によって行われた。

②参加者の決定 参加申し込みは担当事務局(管理部研究協力課連携第一係)宛のFAXを通じて受け付けた。各セッションともに定員を上回る参加者希望者がいたため、参加者の決定にあたっては先着順とした。なお、参加者希望者全員に参加の可否を郵便にて通知した。

③案内掲示 ワークショップの当日は、放送教育開発センターの玄関、エレベータ前などに、ワークショップ（特にFDセミナー室の場所）についての案内を掲示した。

④受付 ワークショップ当日は、FDセミナー室前に受付を設置し、担当事務部局の事務官が参加者の出欠席をチェックした。また、何人かについては、玄関、および、国際シンポジウムの会場からFDセミナー室まで誘導した。

⑤休憩所の設置 休憩所をFDセミナー室と同フロアのカンファレンス室（研究図書資料棟701）に設置し、お茶等（セルフサービス）を用意した。

⑥配布資料 参加者への配布資料として以下のものを用意した。

- ・放送教育開発センター要覧（平成7年度版）
- ・「文京文学館」に関する文献（財団法人日本視聴覚教育協会 1989 試行としてのメディア・ミックス教材の開発第1次報告書）
- ・「文京文学館」の学習効果に関する論文（Saga,H.1992 Are we ready enough to learn from interactive multimedia? Educational Media International, 29(3), 181-188.）

#### (8)実施手続き

ワークショップは、プログラム通りに行われた。まず、佐賀が「文京文学館」の開発の背景を中心としたレクチャーを行った。その際、40インチモニターに講師卓のマッキントッシュからワープロソフトの画面を映し、事前に作成した講義をノートを呈示した（文字サイズ24ポイント）。また、口頭による説明にあわせ、随時、画面に必要情報を入力した。

引き続き、「文京文学館」の実演と操作説明が行われた後、個別実習が行われた。その際、参加者からの質問は、望月、宮本が対応した。また、実習は自由な雰囲気で行われ、参加者には、随時、休憩をとってもらった。

実習後、討論会が行われた。佐賀の司会進行のもと、主に実習で使用したマルチメディア教材の感想、および、今後の大学の授業でのマルチメディア教材の利用可能性などを中心に活発に議論が交わされた。討論終了後、今回のワークショップに対する評価用紙が配布され、記入が終了次第、随時、退出してもらった。また、一部の参加者には、後日、評価用紙を郵送した（詳細については後述）。

なお、ワークショップの様子の一部は、ビデオと写真で記録された。

#### (9)運営上の反省点

企画者側からの本ワークショップについての反省点を以下に挙げる。

①ワークショップの目的 本ワークショップの目的は、「マルチメディア教材の利用経験のない大学教員にマルチメディア教材を個別実習してもらい、コンピュータ及びそれと連動した各種メディア機器の基礎的な操作、ならびに、マルチメディア教材の設計思想と構造について理解させる」ことにあったが、ワークショップは特定のマルチメディア教材の説明と実習に終始しており、FD本来の目的は達成されたとは言い難い。もっともこの目的自体、FDという文脈で何を指すのか不明瞭である。当該のワークショップが大学教員の何を向上させるのか、あるいは、大学教員に何を修得させるのかについて、具体的に呈示するべきであろう。

②ワークショップの時間 今回のプログラムは2時間以内ですべて消化された。ただ

し、個別実習を1時間に設定したが、「文京文学館」による自由探索にはやや長いようであり、30分経過以降は休憩をとる参加者が多くみられた。特定のマルチメディア教材の単なる利用が中心のワークショップの場合、複数のものを用意するか、高度な利用まで可能なものを用意すべきである。

③受講者卓 受講者卓は2人で1卓利用するため、参加者はコンピュータの操作を順次交代しながら行っていた。そのため、一方が操作中、他方はそれを観察するか、配布資料を読むか、休憩をとるかなどをしており、実習に集中できないようであった。本ワークショップのように、個別実習が中心の場合、受講者卓は、1人1卓が望ましい。

④国際シンポジウムとの関係 本ワークショップは先述した国際シンポジウムの時間帯と重複したため、国際シンポジウムと掛け持ちしていた参加者の一部は途中でワークショップから抜けざるを得なかった。また、本ワークショップと国際シンポジウムとの関係が不明瞭であったため、運営上、支障をきたすことがあった。特に参加者の中には本ワークショップを国際シンポジウムの一部と誤解していた者もあり、周知方法に問題があったといえる。

⑤講師側のコンセンサス 本ワークショップでは3人が講師を担当したが、目的の不明瞭さから、参加者からの質疑に対する応答に不一致がみられた。複数の講師がいる場合、講師間のコンセンサスを事前に得る必要がある。

## 2 参加者によるワークショップの評価

### (1)方法

①対象 ワークショップ参加者全員(24名)。

②評価用紙の構成 評価用紙はA4版1枚からなり(資料2)、次の質問項目から構成された。

・使用マルチメディア教材の評価:「文京文学館」を体験する今回のワークショップの内容について、先生ご期待あるいは専門分野に照らして、どのようにお考えですか。

・ワークショップの運営方法に対する評価:ワークショップの運営方法(案内、諾否通知、会場、講師の態度、施設・設備など)はいかがでしたか。

・ワークショップのニーズ:今後、このようなワークショップを開催するにあたり、ご自身あるいは同僚の方々は、どのような内容やテーマをとくにお望みになるかご示唆ください。

・回答はすべて自由記述とした。

③手続き 先述したように、ワークショップの終了時に評価用紙を配布し、記入してもらった。帰りの交通機関の時刻のために記入時間が無かった者、及び、ワークショップの途中で帰った者は評価用紙を郵送し、返送用の封筒で送付してもらった。

### (2)結果

24名中、14名からのみ回答が得られた(回収率58.3%)。そこで、回答者数もそれほど多くないこと、および、本調査が組織的に計画されていないことから、自由記述データ

の要約はさげ、資料提供にとどめたい。以下、煩雑ではあるが、回答結果を質問項目ごとに原文のまま掲載する。なお、中黒点と番号は、回答者の区別のために便宜的に付記したものである。

#### ①使用マルチメディア教材の評価

・01 お恥ずかしいお話ですが、私にとって今回のような体験は初めてのことで、非常に貴重な体験でした。専門分野として私が現在も研究を続けている教育心理学は言うまでもなくサブ研究領域としての視聴覚教育・放送教育の面でも、全く初めての経験でしたので、非常に感銘深く体験させていただきました。深く感謝しております。

今後このような新しい教材を積極的に開発し作成していきたいと思っておりますと共に自身、この領域に関してももっともっと勉強して行きたいと期している次第です。

・02 なぜ、今、1989年開発の「文京文学館」のワークショップなのかその意味（意義）がわからない。文系といえども（文系だからこそ）、最新のテクノロジーを用いたfineなレベルの経験がしたかった。（私の専門は“心理学”なので、特にそう強く思う）

・03 文京文学館を体験して、大変参考になりました。パソコンとTV・ビデオの組合せは、それぞれの特徴がよく生かされていると考えられます。

・04 私の専門は数学ですが、ピタゴラス、ニュートン、ガウス、ガロアなどの数学者を何人か取りあげて数学の歴史についての教材のようなものが、アナロジーとしてすぐ思いつきます。（つくる手間を考えるとゾッとしますが。）今の技術でどういうことが可能であるかということがわかりました。

「文京文学館」は学生のとき根津神社のちかくに5年ほどすんでいましたので、非常に興味深く見せていただきました。題材そのものがすばらしいので、日本近代文学の副教材としておもしろいと思います。このようなソフトが20～30本あればコンピュータとレーザーディスクプレーヤーのセットを置くことに実用的な意味が出てくると思います。「文京文学館」の映像については、コマ送りの機能はあまり必要性がなく、早おくりとか、映画を2～3分のカットに分けてその部分のみを再生するという機能がほしいと思いました。

・05 私の専門は、感性情報（メディア、音声情報処理を含む）で、情報（工）学的観点から興味がありました。プレゼンテーションが一昔前ということやや古いという感じを受けましたが、このような（例えば文学の）データベースを作ることは、今後ますます重要になるのではないかと感じております。ご参考までに、私共の感性情報に関する最近の研究結果を表発した論文別刷を同封いたします。例えば、百人一首に関するデータベースがあれば、私共の研究にリンクして、より深い感性情報に関する研究ができるのではないかと考えております。今後のご発展を期待致しております。

・06 かなり上手に作成していると感じました。が、東京の文学者は、様々いるので、出来れば他の作家が登場するものも作成して欲しいと思いました。1つ1つのショットが少し長いので、もう少し短くすれば啄木をカットしなくても良かったのではないかと

思います。(文学、演劇専攻)

・07 「文京文学館」のうわさは、数年前に聞いて、その折一度実物に触れてみたいと思っていました。今回この研修会に参加できて、とても参考になりました。

将来、専門分野(メディア表現法など)で似たようなソフトを作りたいとの夢もっています。その場合に、今回の佐賀先生(制作の中心スタッフの一人)からお聞きした「背景の話」は、「どの程度の素材をどのような準備すべきか」の良いヒントになりました。

・08 ビデオと一体になって面白い作品でした。しかし内容は、一通り知っている人々のことでしたので意外性という面からというところちょっと物足りない気がします。対象をどこにおくのか、作者の意図などが強く出る作品がこれからでるとよいとおもいます。

・09 マルチメディア教材のスタートを切った「文京文学館」を体験できて感激です。

・10 非常に興味深い内容のワークショップでした。

文学館のソフトはなかなかよく作られていて、多少文学趣味のある程度の私にとって見飽きないし、もっともっと内容があってもいいというくらいの感じでした。鷗外中心の構成ですが、交友のあった作家・文学者にもっと深く入ってほしいという欲張りな希望です。

・11 「文京」は日本文学、文学史関係のクラスに導入すると非常に改革的になるでしょう。視覚と音響が入って、活字のみでの文学関係の授業が活性化されると思います。

専門は英語学・言語学なので直接的な関係はありませんが、こちらの分野にもメディアミックスのこのようなものを作って頂ければ幸いです。

・12 マルチメディアがどういうものであるかという点では、非常に理解しやすいと思った。

・13 「文京文学館」を製作されてから今までの間に、世の中はかなり進歩しCD-ROM等いろいろ工夫がなされたものが出ましたので。

・14 よくできていると思いますが。

## ②ワークショップの運営方法に対する評価

・01 申し上げることは全くございません。きわめて良かったと存じます。

・02 短時間のワークショップなので、コーヒータイム及びその準備は不必要と思われた。もっと長時間(1日とか)なら必要、逆に言えば、もっと長時間ワークショップをやってほしかった。その他はgood。

・03 ワークショップの案内・諾否通知・会場・講師・設備はゆきとどいていました。参加者の背景がわかると、討論もし易くなったかも知れません。

・04 諾否通知をもっと早くいただけたほうが良かったと思います。(私の場合はシンポジウムの前日のセッションだったので予定をたてにくいという面がありました。)その他は良かったと思います。

・05 諾否通知はもう少し早めにいただければ有難く存じます。会場・講師の態度は結

構かだと思います。但し、講師あるいは他の研究者の方の間で、ご回答に多少のくい違いがありました。設備は、できれば一人一台ずつ使えば良かったと思います。その他、時間はもう少し短くしても良いと思います。(時間を短くして、セッション数を増やしてはいかがですか)

- ・06 良かったと思います
- ・07 いずれもスバラシイと思います。時間配布や資料・機器の準備など、行き届いていたことを感謝します。この運営方法も、大変参考になりました。ビデオ撮影もご許可くださいます、ありがとうございました。
- ・08 お世話になり有難うございました。
- ・09 ご案内等、大変親切でした。講話も初心者にも分りやすい内容でした。
- ・10 非常によく配慮された運営と考えます。ありがとうございました。
- ・11 開発の背景に関するご講義も大変興味深く思いました。TVの位置が近すぎて、1時間見るのにはやや苦痛でした。
- ・12 講師の先生による説明はとてもわかりやすかった。
- ・13 ご案内、諾否通知はもう少し早めの方が都合をつけ易いと思います。このような設備を使用し、更に高度なワークショップを企画して下さる事を期待しています。
- ・14 大変ご親切で、うれしく感じました。

### ③ワークショップのニーズ

・01 私どもの大学では、現在、12名の有志教員が、教授システムかいぜん研究会(学内の公的な組織)をつくって、講義・演習・実験・実技実習などの各方式と各教授内容との関連性を考慮しながら、今までの教授システムを反省し、いかにして効果的な(学生たちが積極的に学習活動を、展開するようなものに改善していくかを話し合い、試行錯誤的に進めております。しかし、まだその初期の段階にありますので、今回のような進んだ教材ないし方式に関するワークショップについて、その内容やテーマについての希望や注文はまだ出しかねます。

私自身が、今後とも、このような進んだ内容のワークショップに積極的に参加して、その内容をどんどん吸収したいし、さらに、今後、研究会所属の教員ができるだけ多く、この種のワークショップなどに、積極的に参加できるように条件整備して行かなければならないと思っております。

・02 「最先端」を「わかりやすく」が大原則だと思う。単なる“データベース”開発ではおもしろくない。文系におけるパラダイムを変換するようなテクノロジーの開発を強く望む、お願いします。

・03 映像とパソコンの組合せで、作製できる、教材ノウハウについて、ワークショップを開催して頂くとよいと思います。テーマは別にこだわりません。

・04 去年のスタジオ等の見学も実際にどういことが行われているとかか技術のレベルとかがわかって良かったし、今年の内容もおもしろかったと、私は思います。「百聞は

一見にしかず」というようなことを私は期待しています。作品の完成度については想像力で補って見るということもあります。

・05 マルチメディア関係。感性情報処理関係。上記に関して、実際メディアの作成(CD-ROMの作成、AVメディアの編集・作成等)。今回は貴重な体験をさせていただき有難うございました。また何かの機会がありましたらご案内をお送り下さい。

・06 ビデオ教材は教育効果がありますが、編集や演出(?)が出来るかぎり芸術的な様なものを作らなければいけないと考えます。

・07 FDワークショップの実施方法(授業改善法などにかんする「教員研修会の実施方法」)自体の研修会のモデルを開発して下さると、助かります。各大学では、FD関連のいろいろな研修会を実状に合わせて、実施し易くなると、思います。このFD研修会をビデオ撮影して、それをInternet等で流して、希望大学でそれを受信し、参画できるような「遠隔研修システム」を開発していただければ、幸いです。

・08 技術的な事柄、製作過程などが個人的には興味があります。

・09 最新の技術によって開発された作品のデモンストレーションとその作成方法の解説を希望します。

・10 この種のソフトの作り方についてのもう少しくわしい理論づけ、あるいは、これを使う上での方法等についてのdiscussionも、面白いかなと思います。

・11 先に書きましたが、英語関係、語学関係一例えば、外国人教師による様々なグループ活動による授業改善、教授法なども取り入れていただきたいです。

・12 簡単なものでよいから、マルチメディア作成ができる機会があればよい。同じ分野の先生方で教材に関する情報交換できるとよい。

・13 (記入なし)

・14 とくに思いつきません。数がふえることを希望しています。

#### (1)考察

以上の自由記述をみる限り、①使用マルチメディア教材、②ワークショップの運営方法に関しては、おおむね肯定的な評価がなされている。しかしながら、否定的な評価もいくつかみられ、それらは前述した運営上の反省点と軌を一にしていることがわかる。

一方、③ワークショップのニーズについては、マルチメディア教材の制作のノウハウに関する研修を多くが希望し、各自の専門分野、担当授業に適したマルチメディア教材を自ら制作し、利用していこうと考えているようである。すなわち、今回の参加者の多くはコンピュータの初心者であったが、そうした層の大学教員にもコンピュータを中心とした各種メディアの授業での活用の志向が強いことをうかがわせる。

かくして、いくつかの問題点を残したが、今回のFDワークショップは、今後の方向性を探る上で意義あるものであったと思われる。今後の課題については、別稿の「FDセミナー室整備状況と今後の課題—メディア技術とFD—」を参照していただきたい。

ただし、実際に課題を解決していく上では、もはや、一研究室の僅かなメンバーでは不可能であることは明白であり、放送教育開発センター全体で取り組むことが急務とい



える。特に、FDプロジェクトと関連する目的をもつ他のプロジェクトとの連携を切に願う。

## 資料1

# 平成7年度 放送教育開発センター ファカルティ・ディベロップメント ワークショップ

### [趣旨]

放送教育開発センターでは、我が国の旅等教育の充実・向上に資するために、「高等教育における教授システム及びファカルティ・ディベロップメントに関する総合的研究」のプロジェクトを運営しております。

同プロジェクトでは、高等教育における授業法の改善・開発をめざし、基礎的な調査研究を行うとともに、全国の高等教育機関の先生方を対象に、セミナーやワークショップを開催しています。

本年度は、放送教育開発センターが11月7日（火）～8日（水）に「国際シンポジウム」を開催する日程に合わせ、その前日と初日午後、「ファカルティ・ディベロップメント・ワークショップ」をもつことといたしました。

ワークショップのテーマは、「マルチメディア教材『文京文学館』を体験する」です。我が国で開発された、ほとんどはじめての本格的マルチメディア作品『文京文学館』を、参加のみなさまに実際に体験していただくというものです。会場は、現在、施設設備を整備中の当センター内「ファカルティ・ディベロップメントセミナー室」ですが、機材数の関係で、定員24名（各セッション12名）に限らせていただきます。

### [開催日時]

セッションA:

平成7年11月6日（月）午後3時15分～5時15分

セッションB:

平成7年11月7日（火）午後3時15分～5時15分

（セッションA、セッションBとも同一の内容です。なお、セッションBは、同時開催の「国際シンポジウム」ポスターセッションと同時間帯になります。）

### [場所]

放送教育開発センター、研究図書資料棟7階

「ファカルティ・ディベロップメントセミナー室」

### [担当講師]

放送教育開発センター「FDプロジェクト」メンバー

（佐賀啓男教授、望月要助教授、宮本友弘助手）

[対象]

全国の高等教育機関の教職員。

マルチメディア・ソフトを未経験の文科系の方を主に想定しています。

[参加費]

無料。ただし、旅費は参加者（所属機関）の負担。

[実行組織]

放送教育開発センター「FDプロジェクト」

主査・佐賀啓男（内線2367）、望月要（2369）、宮本友弘（2363）

同研究協力課

連携協力第1係（2215）、国際協力係（2218）

## プログラム

1. 『文京文学館』開発の背景（約20分、佐賀）
2. 『文京文学館』デモンストレーション（約20分、佐賀）
3. 参加者による『文京文学館』の自由探索（約1時間、望月、宮本、佐賀）  
（休憩—ご随時：7階にカンフェレンス室=701=にお茶の用意がございます）
4. 協議（約20分、全員）

資料2

## FDワークショップに関するアンケート

はじめてのFDワークショップにご参加いただきありがとうございました。  
今後の参考とさせていただくため、以下ご回答いただければ幸いです。

1. 『文京文学館』を体験する今回のワークショップの内容について、先生のご期待あるいは専門分野に照らして、どのようにお考えですか。
2. ワークショップの運営方法（案内、諾否通知、会場、講師の態度、施設・設備など）はいかがでしたか。
3. 今後、このようなワークショップを開催するにあたり、ご自身あるいは同僚の方々は、どのような内容やテーマをとくにお望みになるかご示唆ください。

ご協力ありがとうございます。この用紙は、担当者にお渡しいただくか、後日、下記にお送りいただければ幸いです。（佐賀、望月、宮本）

〒261 千葉市美浜区若葉 2-12  
放送教育開発センター  
教材研究室 望月要 宛 FAX 043-275-5117